



「タカハヤ」



バツと見はいかにも地味な川魚といった姿。しかし繁殖期にはメスの鼻先がなぜか長く伸びるという秘密の特徴を持っている不思議な魚。長く伸びる理由は何のためかさっぱり分からないのだが。淡水魚の中でもイワナやヤマメと並び最も上流域まで見られ、川幅の狭い支流やそこから水を引く水路でよく出あう。紫川では源流域のおよそ魚がいるとは思えないような鱒淵ダムに流れ込む小さな沢などにおいて、そのたくましさで驚かされる。

ところが熊本県の市街地にある江津湖周辺では様相が一変する。平野部に位置し周囲を住宅地に囲まれているような場所なのに、湖や近くを流れる水路の中にもタカハヤがすんでいるのだ。北九州ではまずあり得ないその光景はコイやフナ、メダカやタナゴの仲間といった平野部の淡水魚オールスターズと一緒にタカハヤも泳いでいるという違和感ありありの組み合わせとなる。大抵このような場所は水が澄み渡り、水に浸かると「ここは溪流か?」と思うほどひんやり冷たく感じる。これは江津湖周辺から豊富に湧き出る湧水のためで、一年を通じて水温が18度前後に保たれているおかげなのだ。

昔タカハヤをはじめオイカワやオヤニラミを収容した水槽で病気が発生し、治療の為に水温を28度まで上げたことがあった。すると水温上昇に伴いタカハヤだけが次々と死んでいったのだ。よくよく考えれば本来山間部の水温変化の少ない低水温にいる魚であり、28度などという高水温は彼らにとっては未体験ゾーンだったのだろう。結局のところ彼らの生存は何より低水温という条件に支配されていることがうかがえる。

話は変わり、夏休み明けの9月になるとよく寄せられる相談がある。「夏休みに山へキャンプに行って、そばを流れる川で魚をとって飼っています。メダカと思って捕まえたけれど、なんだかメダカじゃないような気がしてきて…これは何ですか?」そこで問題の魚の画像を見せてもらおうと、大体その正体はカワムツがこのタカハヤの仔魚である場合がほとんど。一般の方にとって小川にいる小さな魚はほとんどすべてメダカと思われるようですが、キャンプに行くような山間部の溪流で見られる小さな魚はメダカではないと思って間違いないんです。



スタッフの飼育日誌

“頼みの綱は紫川の河口にあり!”

今日は生き物たちが待ちに待った2日に一度の給餌の日。大型生態水槽をのぞくと早速お腹を空かせたブラックバスやカムルチーたちがそわそわと動き出し始めています。「待ってるよ、もうすぐおいしい小アジをご馳走してやるから」と急ぎバックヤードの冷凍庫を開けると「あっ小アジがない…」冷凍保存中の餌の在庫を切らしてしまっていた。さあどうする!?

そんなピンチを救うのが中面でも紹介したマハゼです。毎年8月下旬~11月初旬は仕事の合間をぬって紫川でハゼ釣りをし餌の確保に努めています。

川でたくさんマハゼが釣れ始める8月までは旦過市場の鮮魚店等で激安小アジを大量に購入して仕入れたり、展示する生き物採集のついでに大量に捕獲してきた外来魚を冷凍庫にストックして与えています。

ところがこれから冬になると外来魚採集も難しく、またアジも海が時化で漁に出られな

い日が多くなり入荷量が減るため安価での入手が困難になるのです。

つまり冬の餌不足を乗り切るには秋のハゼ釣りです。どれだけハゼを大量に確保できるかに懸っているのです。現在バックヤードの冷凍庫の中にはコツコツ釣り貯めたハゼがギューギューに詰まっています。これだけあれば何とか来年2月までは持ちそうです。

というわけで一応断っておきますが、写真のようにスタッフが楽しそうに川で釣り糸垂しているのを見かけても決して「仕事をサボって遊んでいるとはけしからん!!」と怒らないで下さい。これもあくまで大型肉食魚の餌を確保するというとても

大事な仕事

なのであります。



楽しそうですがこれも大事な仕事のうちなのです。



わずか20分でこの釣果! 楽しくて仕事であることを忘れ没頭してしまいます。

去る10月9日(日)八幡東区を流れる板櫃川「水辺の楽校」でオヤニラミ観察会を行ないました。思い起こせば2年前(平成26年7月)、今回同様ここでオヤニラミ観察会を予定していたのですが当時は朝から大雨。現地までは行ってみたものの増水した川を目の前に中止せざるを得ず、泣く泣く引き返したという苦い記憶がありました。

そしてリベンジすべく企画された今年の講座。前日の台風接近による雨の影響で、またもや開催が危ぶまれましたが、いざ現地に到着してみると奇跡的にそれほど川も増水しておらず2年越しで無事に開催することができました。

第48回水辺の生き物講座 板櫃川オヤニラミ観察会を開催しました



前日の雨で気温が下がりこれまでの残暑が嘘のように涼しかったこの日。川の水もかなり冷たく感じましたが参加者のみなさんは元気に川の中でひたすら網を振り、オヤニラミが網に入る度に歓声をあげながら採集を楽しんでいた様子でした。

しかも今回は特典が用意されていました。一番大きなオヤニラミを捕まえた人には素敵な景品がもらえるとあって、みなさん少しでも大きなオヤニラミを捕まえようといつも以上に熱心に採集に取り組んでいました。

白熱した講座の様子は本誌中面でもご紹介しています。ぜひご覧ください。